TOP in SHONAN vol.104

「地域社会のバリアフリーを広げる」

訪問ボランティアナースの会
キャンナス代表
菅原 由美 氏

訪問ボランティアナースの会「キャンナス」代表の菅原さんが介護の世界に足を踏み入れたのは、御主人の百歳になる祖母の介護がきっかけだった。「義母と交替で病院に泊まり込みました。毎日ではなくても嫁の立場なので、『私がいる時に何かあったら…』と思い夜も眠れません。正直、いつまで続くのかとも思いました」。

その後、祖母が体調を崩し胃カメラで検査を、と言われる。菅原さんは結婚前、1年ほどナースとして働いていた。「そんな検査が百歳の老人に必要かどうか医師と意見が分かれ、家で看ることにしたんです。そうしたら病院に行く必要もなくなり、逆に楽になりました」。その後も義母、義父と介護は続くが、仕事をしながらの在宅介護を貫いた。

「介護は白黒はっきりつけられるものではない。これはいい、これはダメっていうことが行政には多すぎると思います。体に点滴の管が入っている患者に対して、かつて介護士はおむつ換えもできなかった。ナースと家族しかボディタッチできなかったんですよ。私のようにたとえ少ししかナースの経験がなくても、資格があれば点滴のパックも変えられる。ナースならできることがたくさんあります」。

ナースの資格があれば、介護で手伝いできることはたくさんある。それがキャンナスを立ち上げるきっかけとなった。97年ナースを中心として会を発足、現在、活動拠点は神奈川を中心に沖縄までも広がりを見せている。

「今まで介護情報って閉鎖的で、いざ必要になってもすぐには詳しい内容がわからない状態でした。駅前で旅行のチラシみたいに資料を手に入れられれば、介護を受ける側も自分で行きたいと思う施設を選べるようになるはずです。これからは介護事業者ももっと情報提供を行って、選ばれるようにならなくてはいけません」。キャンナス本部の事務所は、藤沢駅南口から徒歩数分のところにある。同じ建物内にデイサービスもあり、お年寄りはマンションの一室から買い物やランチにと出かける。「うちに来ているお年寄りを見てください。おしゃれですよ。みんな外で食事とかしてるから、着るものにも気をつけています。一人では外に出られなくても、たまには外出したい。でも誰が連れていくかとなると、身内でも大変なんです」。

介護制度というものは「施設完結型」で、介護を受ける者は基本的にその施設内で過ごさなくてはならない。「でも、私だったらそんなデイサービスは受けたくないです。施設内で手すりにつかまって歩く練習をするなら、デパートで買物をしながら歩いた方が楽しいですよね。外に出ればリハビリになるし、普段触れ合いのない若者も、お年寄りと共にいる社会というのがわかるようになる。介護を受けながらも社会と触れ合う、地域のバリアフリーが実現できたらと思います」。（K・E）